

冲

7
2017

ISSN 1015-1305



青胡桃

能村 研三

電車通勤

三月の初めから俳人協会に通うようになって三か月が経った。これまではウィークデーのほとんどは自宅をベースに動いてきたが、毎日定時に行動することによりやつと体が慣れてきた。役所勤めの頃は自転車通勤が主であったが、六十代後半の今になって電車通勤という経験をする事になった。本八幡から大久保までは総武線で乗り換えなしで行けるのだが、混雑時は座れないので、地下鉄新宿線の始発の本八幡から座って市ヶ谷まで行き、ここで総武線に乗り換えて大久保まで通っている。市ヶ谷まで来ると総武線も空いてきてすべての行程を座ったまま通勤できる。大学時代以来の電車通勤に何か新鮮なものを感じている。電車の中では締め切りに迫られた選句などをすることもたまにはあるが、極力目を瞑って休むようにしている。帰りは、市ヶ谷からの電車が急行になる

辻
棲
の
危
ふ
く
な
り
ぬ
蟻
地
獄

心
し
て
使
ふ
旧
か
な
菖
蒲
葺
く

話
し
出
す
時
が
同
時
や
冷
し
酒

予
報
士
の
神
田
祭
の
話
よ
り

万緑の一点となる鳩魂碑

偏照りのあとの偏降り青胡桃

手水舎の水壺青し薄暑光

根津さまの社紋は卅五月糸雨

頭低う朱鳥居くぐる若葉雨

母村田美津江逝く

蹠に木目の渦を読んで夏至

ので、一時間足らずで我家に着くことができる。今のところ寄り道をすることもなく、早く家に帰って選句や原稿書きの時間にあてている。

カルチャー教室や、小さな句会の指導については、曜日を変更したりして調整をしているが、以前より時間の使い方がうまくなったような気がする。

協会が休みとなる木曜日に他の予定を入れざるを得なく、土曜、日曜の句会指導などプライベートの時間が殆ど無くなったのが少し寂しい。

蒼茫集



安息日

荒井千佐代

蘭船の細き帆柱春三番

姉三人逝きてしまひし桜かな

春の日の朱のまぶしき聖玻璃図

安息日祭壇に咲く酔芙蓉

居間にある猫のねぐらや春満月

洗濯物たたためばぬくし竹の秋

親不孝通り

広渡敬雄

印紙貼るスポンジの水鳥雲に

胴吹き桜の幹や古武士めく

とくとくと湧水が割く花筏

親不孝通りに春を惜しみけり

ナプキンのほどよき折目鳥の恋
紳士服量販店や麦の秋

天国の鍵

小山田子鬼

天国の鍵ちらつかせ揚雲雀

後悔のにじむ布団を干しにけり

遠雷や日記に鍵の欲しくなり

パソコンの画面が写す夏の風邪

籐椅子に和みてドラマ逃しけり

田を植うる小昼きなこの握り飯

青葉風

北村幸子

青葉風山ふつくらと太りをり

競ふことなくて歩の合ふ若葉径

幟立つ遠嶺は雲のはしりけり
せせらぎは心音のごと草芽伸ぶ
添へられし名札負けする白菖蒲

遠鳴る屋

渡辺輝子

真間の井をひと巡りせり余花ぐもり
船笛の遠鳴る昼や鳥雲に
道問へば指差すかなた陽炎へり
風聴けばまなじり湿る花ぐもり
万緑や外濠淀む武者返し
夕涼の弓引きしほる静寂かな

緑さす

杉本光祥

志賀直哉旧居

緑さす手斧仕上げの床柱
世渡りが下手で目刺を食うてをり
初燕切り込んで行く広野かな
名にし負ふ標本木も花は葉に

楠若葉くらたけんさん今もなほ
一本も休む足なき百足虫かな

微酔ほど

柴崎英子

能楽堂松のみどりの滴れり
春惜しむ太古へ弓を引き絞り
ひらがなの文のかがやき新樹光
微酔ほど影のゆらめく夕牡丹
スイッチバック青葉隠れの一輛目
露剥く夜背に水音風の音

夏に入る

高橋あさの

行く春やおもひ思ひに坐る牛
荒鋤田の水待つ八十八夜かな
ふるさとは語りて倦まざる秋
花もたぬ樹の鬱然と夏に入る
殉国の碑に適ひたる花は葉に
葉桜の風しんかんと能楽堂

カーネーション

田辺博充

かかる野にソーラーパネル亀鳴けり
春夜抱くギターは孫の重さかな
竜天に登る荒磯の汐つづみ
麦踏むや海馬の老いを憂へつつ
行者過ぐ森の春子に目もくれず
カーネーション燃ゆ昏睡の母の部屋

屈伸

宮内とし子

屈伸に骨の応へる立夏かな
雲水のつむりの青さ風五月
新緑や切株二人掛けにして
ものの芽や作家の机上虫眼鏡
消しゴムのやうな雲浮く端午の日
五月憂しピタミンBは幾つまで

山頂

岡崎

伸

山頂や万緑三百六十度
瀬しぶきも瀬音も白し床涼み

選り抜きの生酒一本初鯉
余生かな昼の河鹿に耳委ね
雲海に紺青の天ありにけり

桜散る

大川ゆかり

花冷えや軋みつつ来るファクシミリ
緩急を樂しむやうに桜散る
ときをりは春雨眺め書く手紙
合唱の揃はぬ声やクローバー
風のやうな春のシヨールを巻きつける
燃えさしの燐寸のにはひ昭和の日

葉桜

細川洋子

腫の夜トリユフはらはら削らるる
目蓋とろりなんぢやもんぢやの花咲けり
ふがふがと大器の威厳墓
撒水車砂礫もんどり打ちてゆく
金魚玉堂々巡りせる思考
葉桜や改めて生かされてゐる

星 座 岡部玄治

こ糸張りて一鳥よぎる残雪嶺
すこし老ゆたんぼの野の明るさに
またたきて星座さだまる抱卵期
さくら貝さいはひといふうすきもの
身のなかに海鳴りたまる落椿
赤椿流るる浦のほとけみち

ラブレター 渡部節郎

揚雲雀ひと呼吸して落雲雀
砕けては卯波しづもる潮溜り
千鳥との距離は縮まず潮干狩
幽暗に白木蓮の浮かびをり
糸柳風のあしらひ上手かな
万愚節妻へ写経のラブレター

封度の字 頓所友枝

ぼつねんと赤電話あり昭和の日
山脈の見えぬ地に嫁しみどりの日

ぼうたんや真白に敵ふ色無くて
更衣昭和歌謡を口ずさみ
封度(ポンド)の字大砲に知る青葉冷
花は実にパール博士の碑に薄日

清和の天 甲州千草

帰りにはいつも亀見て新入生
豆の花梯子押へに呼ばれたり
聖五月丸さ重ねて憲兵碑
献木の木斛の列清和の天
辣蕪をかりりと深長な意見
夜目遠目なぞへ仄かに山躑躅

天の扉 枋内和江

遠き日のおのれに逢ひぬ余花の駅
花過ぎの賢治の詩碑に冷えすこし
無住寺に生れ偷安のかたつむり
花苔の咲きくたびれし丹の伽藍
みちのくの智恵子の泉とこしなへ

潮鳴集



さみしい男

能美昌二郎

みんなして

齊藤 實

* 囀やさみしい男みんな来い
波まかせ磯巾着の孤独かな
路地深く日差しを運ぶ石巖玉
鹿尾菜採り潮ごと上げる重さかな
船音の絶えぬ暮春の壇の浦

母 母 大石 誠

* 特攻の遺書に母母青あらし
靖國の母子像に倚る夏の蝶
アカシアの花まだ淡き奥秩父
船頭の美声棹さす花菖蒲
父の日や肩叩き券呉れし頃

* 父母死後のぼつりと残る昭和の日
みんなして春野の匂ひ持ち帰る
夏羽織掛ければ衣紋掛け威張る
麦熟れて穂先を守る槍数多
母の日や若き御霊の深眠り

一 握 内山花葉

結構神社二句
* 零戦の短翼実桜へしづか
一握のビルマの砂よ母の日よ
倒木の愚直に芽吹く湖明り
若竹にふつとけもの匂ひせり
歓迎の手荒きを浴び新社員

雲梯 栗原公子

ぶかぶかの制服が行く朝桜
*桜咲き満つ寂しさの倍になる
雲梯の一本飛ばし若葉風
「あーあー」とマイクのテスト夏来る
愚直とは誉め言葉とも豆の花

魂こだま 安藤しおん

靖國神社 五句

*緑雨のち益荒男立ちの大鳥居
葉ざくらの静寂に聴く魂こだま
松羽目の寂とがらんと杜薄暑
けふの宮居こそ母の日の風包み
零戦に修羅の空間ふサンガラス

新樹光 大沢美智子

桜しべ降る屋台をたたむ槌の音
万太郎ゆかりの蕎麦屋蔦若葉
お濠飛び来て初夏の鳩となる
*神殿の千木の切つ先新樹光
古代蓮ひらく夜明けの水碓

日射し 菊地光子

*シエーカーの終の一振り春の雷
竹皮を脱ぐや予報になき日射し
雨だれの窪み一列軒つばめ
象の鼻ぶらり地を掃く日永かな
花は葉に池の要の登四郎碑

初夏の 多田ユリ子

鳶の輪の大き広がり水温む
テロなきを祈りつ鉄砲百合植うる
空濠の忍者めきたる青蜥蜴
忘るるといふ幸せや新茶汲む
*操舵室より初夏の大東京



飛鷹選評



能村 研三

筆洗ふ花時の水やはらかし 秋山ユキ子

日本には多くの「道」となる武道や作法があるが、「書道」も古くから伝わる「道」の一つである。合理的に墨汁を使うこともあるが、硯に水を入れて墨を擦る時に、心を安定させながら、どのように認めるか構想を練ることも必要である。作者は春爛漫の時期に、書を認めることになった。おそらく自分でも満足できるような字を書くことが出来たのだろう。筆を大切に扱うのも書道を極めるに必要なことで、筆の墨を丁寧洗い流した。その水の感触がやわらかかった。

直角にまた垂直に夏燕 茂呂 昇平

燕は春の季語だが、気持ち良さそうに回遊する燕を見ていると、夏燕の方が元気があって良い。急旋回、急上昇、急降下と

実に忙しい飛び方で、直角に上昇してみたり、鋭角にターンしてみたり大空を自由奔放に飛び回る姿は見ていると気がよいものだ。

祈りととはもどかしきもの春の星 須賀ゆかり

どういった事情かわからないが何か切迫感を感じる句である。重篤な病にかかった人への真摯な思いであろうか。祈りを尽くすしかない自分にもどかしさを感じた。おぼろにうるんだ春の星のまたたきがせめてもの癒しであった。

やつてみせ言つて聞かせて今日穀雨 稗田 寿明

「やつて見せて言つて聞かせて」は山本五十六の有名な言葉で、率先垂範の重要性を説いている。「穀雨」すなわち、春に雨が降って百穀を潤すと言った農業の基本精神に繋がる。

走り根の張りの強さよ今日穀雨 古居 芳恵

俳人の今井聖さんは講演で、「走り根」など俳人が安易に使う言葉の一つと指摘していたが、私は一概にこれを否定しない。地中を飛び出す勢いが力強く表現される言葉で、穀雨の頃の自然界の動きを捉えている。(以下略)

沖作品



能村研三選

筆洗ふ花時の水やはらかし

神奈川

秋山ユキ子

和菓子屋の坪庭仄と余花明かり

若葉風鯉の口中あらかき先師句碑

錠前の錆ぶ姫宮や菫の花

野鳥の会のレンズに入る糠蚊かな

市川

茂呂 昇平

溪音を抱き万緑膨らめり

直角にまた垂直に夏燕

山麓まだ片言の初音かな

堰越えの朝陽散りばめ春の川

埼玉

須賀ゆかり

祈りとはもどかしきもの春の星

水に聴くかすかな鼓動種選

川面へと風の挨拶五月来る

かたはらに奔る山水麻暖簾

一本の竹串鮎を波とせり

からつぼの重箱の艶花疲れ
やつてみせ言つて聞かせて今日穀雨

千葉

稗田 寿明

胃薬で快方に向く春の風邪

先生を呼び捨ての吾子麦青む

天道虫緑の風と飛び立ちぬ

曇りてもひと目千本花疲

走り根の張りの強さよ今日穀雨

古居 芳恵

アナログのわかり易さよ昭和の日

卵かけご飯大好き夏きざす

真砂明の忌日近づく卵浪かな

真つ青な空の匂ひや初つばめ

伸び伸びと育て男の子よ五月来る

木村 美翠

山の子の小さき宝さくら貝

草青む山羊の首輪の抜けさうな

新社員の働くための靴が鳴る